

## 好きなもの、譲れないもの、悩ましいもの

松林麻実子

図書館情報メディア研究科講師

大学院生時代から非常勤講師として働いていたので、教壇に立つようになってからそろそろ丸5年経つことになる。5年というと、それほど大した長さでもないのだが、いろいろな大学でいろいろな科目を担当していたので、それなりに思い出のようなものもある。

非常勤講師時代は、教えることが好きで仕方なかった。どんなに専門に近い授業であっても、それなりに準備をしなければならぬし、大勢の前で話をするのは決して簡単なことではない。毎日が自転車操業で、緊張の連続だった。しかし、それにも関わらず、学生の顔を見るのが楽しくて仕方なかった。今となっては過去の栄光だけれど、学期最後の授業で学生から拍手をもらったこともある。あの頃は、自分の中に「理想の講義」というイメージがはっきりあったように思うし、それに少しずつ近づいている実感があった。

この5年間で私の中に起こった最も大きな変化は、この「理想の講義」像を持つことができているかどうか、という点であるように思う。最近では、近づけている実感どころか、自分の中に「理想の講義」像があるのかどうかさえもよくわからなくなってきた。自分はどのような講義をやるべきかきたら満足するのだろうか。いや、そもそも私は学生に対して話すべきことを持っていないのではないだろうか。教壇に立ちながら、自問自答する日々が続いている。

だがしかし、そう思っているにも関わらず、友人と話していて授業のやり方だの内容だのに話が及ぶと、ついうっかり口論になってしまったりする。いい大人が口論だなんて恥ずかしいと思うし、変なプライドは持たないに越したことがないと思っているつもりなのだが、そんな私にも譲れないものはあるらしい。しかも、授業は譲れないものの一つだったりするらしい。自分で

もよくわからなくなっていると言うのに。

では、そんな私のやっていることとは何か。非常勤時代は司書科目であれば図書館サービス概説から情報検索演習まで何でもこなしたが、現在は専門領域に落ち着いて「情報行動論」と「出版流通論」という講義を担当している。どちらも、図書館情報専門学群の開講科目であるにも関わらず、図書館とはほとんど関わりがない。ガイダンスの際に「この授業は、図書館の『図』の字も出てきませんからね」と言って、学生に笑われてしまったくらいだ。もちろん、厳密に言えば、図書館との関わりもないわけではないのだが、講義の際にはあえて切り離すようにしている。「図書館」は図書館情報学という学問領域にとって格好のフィールドであるが、何でも図書館に結びつけば図書館情報学になるというものではない。それにも関わらずそのことに気付いていない人々が最近多すぎるように思うからである。

学生に受け入れられやすいのは、どうも「出版流通論」の方らしい。これは書籍や雑誌の生産流通プロセスをざっと解説する講義である。ここ数年、出版業界の話題が新聞の一面を飾ることも少なくないので、そういうものを題材にすることでライブ感を出しやすい。

例えば、2004年9月にオープンした丸善丸の内店を評価してみよう、と提案する。そして、実際に見てきた人たちがどのような評価をしているかということを紹介する。業界人はあそこの照明に着目し、間接照明が外国の書店を参考にしている絶妙だと評価した。しかし、建築に興味を持っている先生に言わせると「書架が高すぎて、えらく狭く感じる」「書架が白すぎて安っぽい」のだそうだ。評価は限りなく低くなる。私は分類に着目した。「社会問題」という大分類に社会科学の本が全部放り込まれているという印象を受ける。隣りあわせて並んでいて当然の書籍が泣き分かれになっていたりする。一言で書店の評価と言っても、利用者のバックグラウンドによって千差万別なものとなるのである。余談だが、私は、書店に行くと必ず分類と配架を気にしてしまう。図書館とは関係ないと嘯きながら、どうも私のバックグラウンドは悲しいほど図書館学らしい。それはさておき、多様な評価やコメントとそれらに影響する社会的要因を紹介した後で、さあ、あなたはどうか評価しますか、それは何故ですか、と問いかけて講義を終わりにする。

こうやって自らの講義を文章にしてみると、やはり私にも学生に伝えたいことがあるらしいという気分になってくる。どのような内容の講義であれ、自分の頭で考えて

欲しいということを繰り返しているからだ。逆に言えば、唯一の回答を示しているかのような講義に対して、私自身が不信感を持っているということなのだと思う。図書館の現場で働く際には多様性などと言ってられない場面も多々あるのだろうが、私たちは現場で働いているわけではない。大学がアカデミズムを追求せずに、どこが追及するというのだろうか？

もしくはこれをアカデミズムと呼ぶから、おかしいことになるのかもしれない。ただ単に“考えるって面白いことじゃない？”ということだけを伝えただけなのだ。世の中にはいろんな考え方をしている人がいて、それと自分の考えを比べてみるのはすごく楽しいことだと思う。しかし、そのような考え方は学生にも同僚にもあまり支持されない傾向にある。「で、結局結論は何ですか？」「何が正しいんですか？」という質問を必ず受ける。そのたびに、“自分で考えるのが楽しいのに”と思ったり、インテリジェンスという言葉はもはや死語なのかなと思ったりする。伝えたいことはとてもシンプルなのに、なかなか上手く伝わらない。

特定の目的もなく、時間にも追われることなく、ひたすら考え事をするのができるのは学生の特権だ、と私は思う。そして、それはものすごく贅沢で、あきらめるほど幸せなことだ。そういうことをほんの少いで

も彼らに伝えることができたらいいなと思っている。

(まつはやし まみこ／図書館情報学)